論文

高校生を対象とした大学生による思春期ピアカウンセリングの評価（Ⅰ）

Evaluation of a New Strategy for Youth-to-Youth Sex Education（Ⅰ）

－Effects of peer counseling on high school students－

前田ひとみ[※1]・高村　寿子[※2]・渡邉　至[※3]・大石　時子[※4]

Hitomi Maeda[※1]・Hisako Takamura[※2]・Makoto Watanabe[※3]・Tokiko Ooishi[※4]

Abstract

Objectives : In order to develop a peer counseling program as a new strategy for youth-to-youth sex education, we examined whether the program modified cognition and behaviors of high school students regarding sexuality.

Methods : We administered a questionnaire about sexuality to high school students who participated in a peer counseling program under the auspices of the health centre from December 2003 to July 2004. The questionnaire contained questions about sexually transmitted diseases, contraception, decision-making related to sexual behaviors, self-efficacy and self-esteem. This peer counseling program provided information about sexuality and negotiation skills in face of sexual pressures, was provided for high school students by university students who had finished the peer counselor course using an empowerment-evaluation approach. The data were collected before and three months after the peer counseling program.

Results : 125 high school students were enrolled the peer counseling program. The data from all students were collected before the peer counseling program. Follow-up data from 86 high school students were collected three months later. We were able to analyze 77 paired data on the pre-to post-intervention questionnaire.

94.1% of the high school students had a favorable impression of the peer counseling program. They learned communication skills, and they reported an improved ability to form good human relations after the program. In addition, they reported an increase in knowledge and recognition about their sexuality. Scores of self-efficacy and self-esteem were higher after the program compared with scores before the program. As a result, it was suggested that their decision-making about safer sexual behaviors was improved.

Conclusion : Peer counseling, which is a new strategy of youth-to-youth sex education, was effective in providing information and empowerment about sexuality for high school students.

キーワード： 思春期，性教育，ピアカウンセリング，高校生，エンパワーメント
adolescence, sex education, peer counseling, high school students, empowerment

※1　宮崎大学医学部看護学科　基礎看護学講座
School of Nursing, Faculty of Medicine, University of Miyazaki
※2　自治医科大学看護学部
Jichi Medical University School of Nursing
※3　自治医科大学医学部地域医療学センター公衆衛生学部門
Department of Public Health, Jichi Medical School
※4　天使大学大学院助産研究科
Master's program in Midwifery, Tenshi College Graduate School

Ⅰ．緒　言

我が国の性感染症罹患率は年々増加傾向にあり，男女ともに20～29歳の感染者の割合が最も高く，思春期の女性の感染者数も年々増加している[1)]。このような状況に対し，厚生労働省では「健やか親子21」の目標のひとつとして“10代の性感染症罹患率の減少傾向”を挙げて取り組んできた。しかし平成18年３月に出された中間評価では，定点あたりの10代の性感染症罹患率は増加傾向にあり，改善が認められなかったと報告されている[2)]。

性感染症を予防するにはノーセックス，セーファーセックスといった自己の性に対する正しい知識や認識のもとに意思決定をして行動することが求められる。人間の行動を決定する先行要因について社会学的学習理論においては予期機能が重要視されており，特に行動を起こす前にどの程度うまくできるかという個人の確信であるSelf-Efficacy（自己効力感）が行動の選択や遂行に影響を及ぼすと言われる[3)]。また性感染症の予防行動には相手との人間関係も大きく影響する。相手とのより良い関係を築きながら性感染症を予防していくには，自己の考え，欲求，気持ちなどを率直に適切な方法で自己表現できるようなコミュニケーション能力が求められる。

これまで行われてきた性教育の振り返りから，単に知識だけに重点をおいた指導型の教育とは異なる健康教育手法として，1970年代頃から“仲間”同士で学びあうことを目的としたピアエデュケーションやピアカウンセリングが各国で取り入れられるようになってきた[4)]。我が国においても中学校や高等学校の性教育の分野でピアエデュケーション[5)]やピアカウンセリング[6)]を取り入れた取り組みがなされるようになってきた。しかし，その基盤となる理論や概念は実施者によって様々であるためピアカウンセリングの評価については意見が分かれている。そこで，高村らはヘルスプロモーションの理念に基づき，認知行動療法的アプローチを取り入れたピアカウンセリングが一定の水準を保ちながら実施できるように思春期ピアカウンセラー（以下，ピアカウンセラーとする）養成のためのマニュアルを作成した[7)]。このマニュアルにそって養成されたピアカウンセラーが展開する思春期ピアカウンセリングは，同世代の仲間集団の中で人生や性の価値観についてグループワークやディスカッションを行うことによって，自己理解を深めながら自分の人生の方向性を見出し，自己実現に向けて主体的に意思決定並びに行動選択できる能力を高めることを目標としている[4)]。平成17年度には，我が国の約1/3の都道府県でこのマニュアルにそってピアカウンセラーが養成され，思春期を対象としたピアカウンセリング活動が展開された。しかし，その評価についての報告はまだ少ない[8)9)]。これまでの報告から大学生による思春期ピアカウンセリング講座は高校生[8)]だけでなく，提供する側の大学生側の自尊感情も高める効果があることが示されている[9)]。

性行動は知識，認識，人間関係といった個人的な要素が大きく影響するが，渡邊ら[8)]の思春期ピアカウンセリングに対する高校生の評価研究は集団での比較であるため，受講後は受講前に比べ対象者数が減少しているという限界がある。また思春期ピアカウンセリングの何が高校生の認識や意識に影響を及ぼすかについては示されていない。そこで本研究では思春期ピアカウンセリングの有効性をより詳細に検討するために，同一人物の回答内容の変化を受講前後で比較できるように調査方法を工夫し，思春期ピアカウンセリングの何が高校生の性に対する認識・行動並びに行動の基盤となるSelf-Efficacyに影響を及ぼすのかを分析した。

Ⅱ．方　法

１．調査対象者と方法

平成16年７月から平成17年12月までにA県の６箇所で開催された思春期ピアカウンセリング講座を受講した高校生125名を対象に，受講前と受講後３ヶ月目に自記式質問紙調査を実施した。

調査票は基本属性，性に関する知識・認識・行動の項目に坂野・東條らの一般性Self-Efficacy尺度，RosenbergのSelf-Esteem尺度などを加えた渡邊[10)]の「性に関するピアカウンセリング」調査票を基に作成した。受講後調査には受講前調査項

目に加え，“ピアカウンセリング講座の中で印象に残っていること”，“ピアカウンセリング受講後自分自身の中で変化したことや気をつけるようになったこと”についての自由記載を加えた。

倫理的配慮としては調査票の表紙に本研究の目的と方法を記載し，調査への協力は自由意思であること，回答拒否の権利を有することを明記し，回答の提出をもって同意が得られたものと判断する旨を記した。また分析において受講前後の比較をすることを書面と口頭で説明し，自分が決定した同一の印を受講前後の回答票に記入してもらった。調査票とともに回収用の郵送切手を貼った専用のワンタッチ式封筒を各々の対象者に配布し，個別に回収した。

分析方法は，自由記載については記載された内容によって分類した。５段階法による質問項目は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を「思う」に分類して受講前後で比較した。統計学的解析は受講前後の一般性Self-Efficacy尺度とSelf-Esteem尺度の平均の比較には対応のあるt検定，性交経験率や受講前後の知識の正答率についてはPearsonのχ^2検定，受講前後の性や自己に関する認識・行動についての比較にはWilcoxonの符号付き順位検定を統計ソフトSPSS 11.0J for Windowsを用いて行い，５％未満を有意差ありとした。

２．思春期ピアカウンセリングの方法と内容

高校生を対象とした思春期ピアカウンセリングの実施にあたってはピアカウンセラーとなる大学生の養成が必要である。ピアカウンセラーの養成は看護学を専攻している大学１年生と２年生の希望者を対象に，高村らのマニュアル[4)]にそって行った。

高校生への思春期ピアカウンセリング講座はA県の健康増進課並びに保健所と協力して，１日または２日のプログラムで実施した。受講生は各保健所から高校を通じて，“性に関するピアカウンセリング講座－性について話してみませんか－”と呼びかけ希望者を募った。

思春期ピアカウンセリング講座の目標は①コミュニケーションスキルの基礎を学ぶ，②自己や他者についての理解を深める，③性について考えるの３つとして，２日開催の場合は１日目に①コミュニケーションスキルの基礎を学ぶと②自己や他者についての理解を深める，２日目に③性について考えるを中心として総計９時間のプログラムを実施した。また，１日開催のプログラムは午前中を①コミュニケーションスキルの基礎を学ぶと②自己や他者理解を深める，午後に③性について考えるで構成し，総計６時間で実施した。自己や他者についての理解を深めることを目的としたプログラムには構成的グループ・エンカウンターのエクササイズを取り入れた。コミュニケーション並びに性に関する知識やスキルについては，寸劇や紙芝居，ロールプレイによって大学生が情報を提示し，それらについて最初は高校生が個々に考えてもらい，その後グループワークやディスカッションを通して意見交換をする形式を基本とした。

Ⅲ．結　果

調査票の回収は受講前が125名（回収率100％）で受講３ヶ月後が86名（回収率68.8％）であった。生徒が調査票に記入した印で受講前後の対応が出来たのは77名（61.6％）であった。

１．受講者の属性（表１）

受講生の学年は１年生が25名（20.0％），２年生が68名（54.4％），３年生が31名（24.8％）であり，性別は女性が104名（83.2％）と女性の方が圧倒的に多かった。これまでに思春期ピアカウンセリング講座を受講したことがある者は26名（20.8％）であった。

何でも相談できる友人がいると回答した者は109名（87.2％）であり，現在，彼・彼女がいる人は27名（21.6％）で，これまでの性交経験者は21名（16.8％）であった。性交経験率は男女で有意な差はみられなかったが，学年が上がるほど性交経験率は増加しており，有意な差が見られた。

２．思春期ピアカウンセリング講座に対する受講者の評価

思春期ピアカウンセリング講座を受講して「良

表１　思春期ピアカウンセリング講座を受講した高校生の属性（n＝125）

人（%）

学年	１年生	２年生	３年生	不明
	25(20.0)	68(54.4)	31(24.8)	1(0.8)
性別	男性		女性	不明
	19(15.2)		104(83.2)	2(1.6)
受講経験	あり		なし	不明
	26(20.8)		99(79.2)	0
相談できる友人	あり		なし	不明
	109(87.2)		15(12.0)	1(0.8)
彼・彼女	あり		なし	不明
	27(21.6)		98(78.4)	0
性交経験	あり		なし	不明
	21(16.8)		102(81.6)	2(1.6)

表２　思春期ピアカウンセリング講座の中で印象に残っていること（n＝51）

自由記載：複数回答

項　目	人
人との接し方・話し方について	13
ブレーンストーミング	10
性に関すること	7
STD について	7
自己理解・他者理解	6
コンドームについて	6
価値討論	4
多くの人と話せたこと	3
避妊について	3
相談への対応	2
人生設計	2
断り方	1
その他	2
すべて	3
特になし	3

表３　ピアカウンセリング受講後自分自身の中で変化したことや気をつけるようになったこと（n＝53）

自由記載：複数回答

項　目	人
話を聞く態度が変わった	19
話し方や言葉に気をつけるようになった	16
相手の価値観や気持ちを尊重するようになった	13
セックスに対する考え方や気持ちが変わった	6
将来や人生について真剣に考えるようになった	3
物事を考えて行うようになった	2
相談への対応がわかるようになってきた	2
けじめをつけて考えるようになった	2
自分に自信がもてるようになった	1
生まれた意味について考えるようになった	1
前向きになった	1
特にない・わからない	9

かった」が60名（69.8%）で「どちらかと言えば良かった」が21名（24.4%）であり，両方あわせると94.1%が良かったと評価していた。

“思春期ピアカウンセリング講座の中で印象に残っていること”については51名が記載しており，最も多くあげられたのは「人との接し方・話し方について」で，次いで「ブレーンストーミング」であった（表２）。

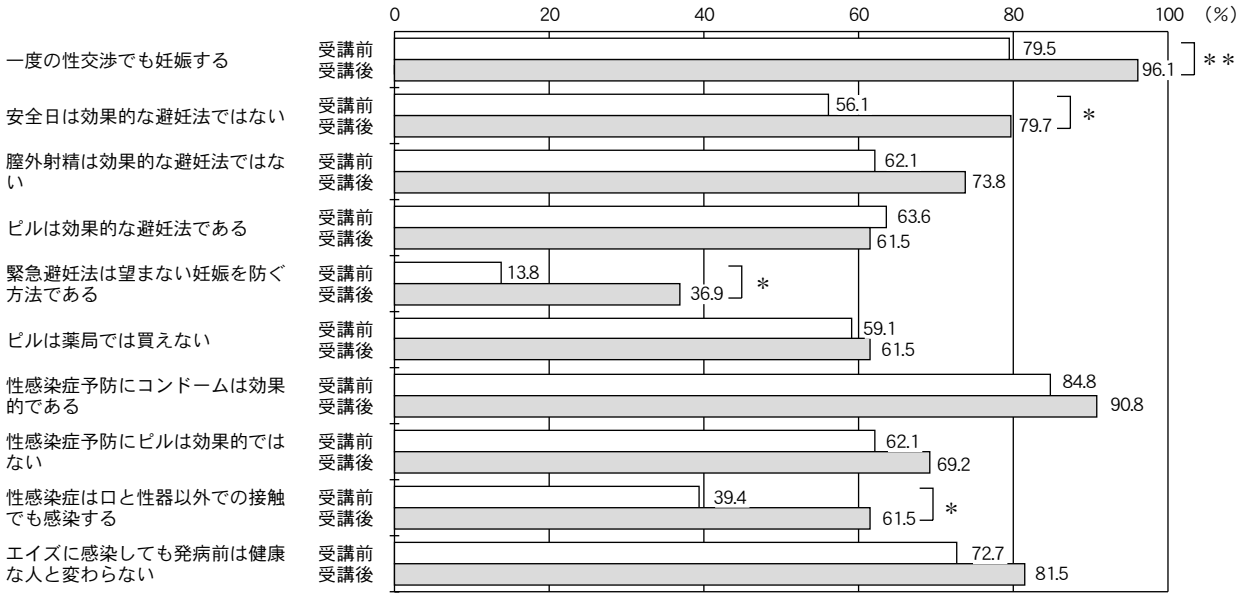
“受講後，自分自身の中で変化したことや気をつけるようになったこと”については53名が記載しており，「話を聞く態度が変わった」が最も多く，次いで「話し方や言葉に気をつけるようになった」「相手の価値観や気持ちを尊重するようになった」などが挙げられた（表３）。

思春期ピアカウンセリング講座の受講時期として最も適切であると思う時期については「高校１年生」が36.0%と最も多く，次いで中学２年生が20.2%，中学３年生と高校２年生がそれぞれ15.4%で，約半数の人が中学生の時期が適切であると回答していた。

３．思春期ピアカウンセリング講座受講前後の比較

受講前後の比較が可能であった77名の内訳は，１年生が19名（24.7%），２年生が43名（55.8%），３年生が15名（19.5%）であり，性別は女性が63名（81.8%）であった。

妊娠や性感染症に関する知識の正答率は全般的に受講後の方が高く，「一度の性交渉でも妊娠する」，「安全日は効果的な避妊法ではない」，「緊急避妊法は望まない妊娠を防ぐ方法である」，「性感染症は口と性器以外の接触でも感染する」につい



χ^2 検定：＊：p＜0.05, ＊＊：p＜0.01

図１　妊娠と性感染症に関する正答率の比較

表４　性や自己に関する認識並びに行動についての受講前後の比較 (n＝77)

	受講前	受講後	Wilcoxon 検定
将来の人生の計画は具体的である	19.5	36.4	p＝0.03
自分自身のことを自分でよく理解している	50.6	71.4	p＝0.002
自分の考えていることをありのままに表現できる	33.8	46.8	p＝0.033
自分の性に生まれてよかった	62.3	70.1	p＝0.134
異性とつきあうのは相手のことをよく知ってから	84.4	89.6	p＝0.285
性交は特定の相手とするものである	81.8	89.6	p＝0.034
友達が性交を経験していたら自分も早く経験したい	16.9	13.0	p＝0.317
性交を求められて、気持ちの準備ができていないとき相手に自分の気持ちを伝える自信がある	68.8	80.5	p＝0.074
知りあって初めて性交しようとしていると仮定したとき			
性交の前に性感染症について考える	68.8	80.5	p＝0.074
性交の前に妊娠について考える	85.7	92.2	p＝0.206
コンドームを必ず使う自信がある	67.5	88.3	p＝0.001
コンドームを正しく使う自信がある	32.5	57.1	p＜0.001

ては受講前後で有意な差が見られた（図１）。

性や自己に関する認識並びに行動については受講後の方が性の受容や態度として望ましいと考えられる傾向を示した人の割合が高くなっていた（表４）。受講前後で有意差がみられた項目は「将来の人生の計画は具体的である」,「自分自身の事を自分でよく理解している」,「自分の考えていることをありのままに表現できる」,「性交は特定の相手とするものである」,“知りあって初めて性交すると仮定したとき”「コンドームを必ず使う自信がある」と「コンドームを正しく使う自信ある」であった。

一般的Self-Efficacy尺度やSelf-Esteem尺度の得点は男子が女子よりも高い傾向がみられる[11]が，今回は両尺度共に男女の得点に有意な差が見られなかったことから合わせて分析した（表５）。一般的Self-Efficacy尺度の得点（平均±標準偏差）は受講前5.7±3.5点から受講後6.9±3.7点に上昇し

表５　受講前後の一般的Self-Efficacy尺度得点とSelf-Esteem尺度得点の比較

(Mean±S.D)

	受講前	受講後	t 検定
一般的 Self-Efficacy 尺度（n＝77）	5.7±3.5	6.9±3.7	p＜0.001
6 点未満（n＝38）	2.9±1.6	4.5±3.0	p＝0.001
6 点以上（n＝39）	8.6±2.2	9.2±2.8	p＝0.099
Self-Esteem 尺度（n＝76）	22.3±4.7	23.2±5.5	p＝0.078
22 点未満（n＝38）	18.5±2.4	20.6±5.4	p＝0.015
22 点以上（n＝38）	26.2±3.0	25.9±4.2	p＝0.644

ており有意な差がみられた。またSelf-Esteem尺度の得点（平均±標準偏差）も受講前22.3±4.7点から受講後23.2±5.5点に上昇していたが有意な差ではなかった。しかし，受講前の一般的Self-Efficacy尺度とSelf-Esteem尺度の平均得点を基準にして２群に分けて比較した結果，一般的Self-Efficacy尺度とSelf-Esteem尺度の両者ともに平均得点より低かった群は受講後に得点が有意に上昇していた。

Ⅳ．考　察

１．思春期ピアカウンセリングの性に関する知識や自己の性に対する認識・行動への影響

本研究の対象者となった思春期ピアカウンセリング講座の受講者は，保健所から高校に向けて“性に関するピアカウンセリング講座－性について話してみませんか－”と呼びかけ希望者を募ったものである。対象者は女性の方が圧倒的に多かったが，他県においても思春期ピアカウンセリング講座の受講生は女性の比率が高いことが報告されている[8]。これらの結果から女子生徒の方が男子生徒に比べ集団で性について他者と話し合うことへの抵抗が少ない可能性が予測できる[8]。

講座の中で印象に残っている項目や受講後に変化したことや気をつけるようになったこととして記述された内容から，思春期ピアカウンセリングはコミュニケーションスキルの習得の場になっており，受講後は相手を尊重した人間関係作りを意識していることが示された。思春期ピアカウンセリングのプログラムにはコミュニケーションについて考える内容や「ふれあい」と「自己発見」を通して参加者の行動変容をもたらすことを目標とする構成的グループ・エンカウンターのエクササイズ[12]を含んでいる。構成的グループ・エンカウンターのエクササイズは自己開示を促し，コミュニケーションを通した他者受容や信頼体験を得ることができ，人間関係作りを学ぶ機会となる[12]。今回の結果から，思春期ピアカウンセリングにおけるエクササイズの体験は受講者の良好な対人関係の形成につながることが示唆され，人間関係を基盤とする性教育に構成的グループ・エンカウンターを取り入れることは意義深いと考える。

性交渉に応じるか否か，またコンドームを使用するか否かについては相手とのかけひきが必要となる。かけひきを成功させるためには，知識，自分と相手に関する情報，情報の分析，予測に加え，本音を語ることが欠かせない[13]。受講後は避妊や性感染症に対する知識の正答率が全般的に上がっていた。それに加え，自分の性への自己受容，自分自身の理解，将来の人生の計画などの項目に対する肯定的な回答の割合が増加していた。このように性感染症に関する知識や自己理解の深まりに加えて，かけひきの基本的なスキルとなるコミュニケーションスキルを修得したことによって，性交時のコンドームの使用についての自信を高めることができたものと考える。

A県では本講座を平成13年度から開催している。約1/5がこれまでに本講座を受講していたことや受講して良かったと回答した者が93.1%であり，渡邊ら[8]の報告でも同様に高い評価であった。このことから，講座の内容は高校生のニーズに即しており，繰り返し受講したいと思える内容になっ

ていると判断できる。

２．思春期ピアカウンセリングのSelf-EfficacyやSelf-Esteemへの影響

行動に対するSelf-Efficacyは，行動の活性化や修正と大きく関連しており，行動選択に直接的な影響を及ぼす。Self-Efficacyを高めるための方法としては「遂行行動の達成」,「代理的経験」,「言語的賞賛」,「衝動的喚起」があげられる[3)]。思春期ピアカウンセリングで行うロールプレイは高校生にとって遂行行動の達成の体験につながり，構成的グループ・エンカウンターや仲間との話し合いは代理的経験や言語的賞賛を得ることにつながると考える。受講後にSelf-Efficacyや自己の性の受容が高まっていたことから，思春期ピアカウンセリングで体験する「遂行行動の達成」「代理的経験」「言語的賞賛」によって自己分析が深まり，自分自身の認知の再構成が行われたものと推測する。

Self-Esteemは自分自身を好ましい人間，自分の行動を積極的に価値のある者として評価する個人の自己の価値についての知覚であり，社会的適応行動や建設的な行動に影響を及ぼす[14)]。Self-Esteem尺度の得点は全体では受講後の方が高かったが有意な差ではなかった。渡邊らの報告ではSelf-Efficacy，Self-Esteemともに受講前後で有意な差は見られていない[8)]。しかし，今回の調査ではSelf-Esteemの得点が平均得点より低かった群は受講後の得点が上昇しており，有意な差が見られた。楢木のフィードバックに関する研究において，ポジティブ・フィードバックは自尊感情を高める効果があり，その効果は自尊感情の高い人よりも低い人の方に見られたことが報告されている[15)]。思春期ピアカウンセリングのプログラムの中には参加者それぞれの良いところや価値のあることを積極的に発見し，それを伝えるようなポジティブ・フィードバックが含まれている。今回得られた結果は，自尊感情の低い人に対してポジティブ・フィードバックを与えることは自己に対する価値観を高める上で重要な意味を持つことを強く支持するものである。

また，小集団における共同学習は自尊感情の形成と変容をもたらすことができ，その効果は“仲間から受容され，支持され，好まれていることの認知”,“正確なコミュニケーションと情報交換”,“学習の動機づけ”,“学習の情緒的関与”によってもたらされる[16)]。一般的に性について人と語ることには抵抗を感じる人が多い。思春期ピアカウンセリングでは相手の言動を批判せず，共感的態度で接することがルールとして決められている[17)]。このルールを守ることによって仲間から受容され，支持される場を作ることができる。そこで，性教育を行うにあたっては，心を開いて話すためのルール作りや導入における場作りがとても重要であり，これらはその後の展開や効果に大きな影響を及ぼすと考える。

Ⅴ．結　語

思春期は周囲の人々との良好な人間関係を築き，一人の人間としての社会的役割を果たすための準備期間であり，仲間との出会いは重要な人間関係の基盤となる。本研究の結果から，思春期ピアカウンセリングは高校生にとってコミュニケーションスキルを修得する場となっており，対人関係や自己理解，人生に対する認識を深める機会となっていることがわかった。さらに性に関する正しい知識やスキルを獲得するだけではなく，性を自分に関係あることとしてとらえることができるようになり，その結果として性行動の意思決定能力や効力予期が高まっていると言える結果が示された。そしてこれらの効果は受講後３ヶ月以上維持できていることもわかった。

本研究の限界は一県のみが対象であることや，思春期ピアカウンセリング受講後の行動の実際を把握することまでは及ばなかったことである。最も適切な思春期ピアカウンセリングの受講時期については中学生という回答が最も多かったことや性に関する諸問題が低年齢化している現状を考えると，思春期ピアカウンセリングの最も効果的な開催時期の検討や受講後の行動評価の指標の開発が必要である。

謝　辞

調査にご協力頂きましたA県の思春期ピアカウンセリング講座の受講生の皆様，思春期ピアカウンセリング講座を主催いただきました保健所の皆様に深く感謝いたします。

文　献

1）厚生労働省：感染症発生動向調査；性感染症報告数，感染症発生動向調査　http://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0411-1.html

2）「健やか親子21」推進検討会：「健やか親子21」中間評価報告書，8-11，2006

3）Bundura, A : Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change, Psychological Review, 84, 191-215, 1977

4）高村寿子：今，なぜピアカウンセリングなのか，思春期の性の健康を支えるピアカウンセリング・マニュアル　ピアカウンセラー養成者・コーディネータ（調整役）版，10-18, 小学館，東京，2005

5）宇野暢恵, 荒木田美香子, 戸川僚子:中学生を対象としたピアエデュケーションによる性教育の有効性の検討　９ヵ月後までの追跡調査, 思春期学, 23, 318-327, 2005

6）上澤悦子：高校生のための性のグループピアカウンセリング　性感染症拡大防止に役立つ実践的教育法, 性と健康, 4, 25-28, 2005

7）堀内成子，竹内千恵子，渡辺純一，他：ピアカウンセラー養成マニュアル作成に関する研究，平成15年度厚生労働省科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書，536-559, 2004

8）渡邊至：「性に関するピアカウンセリング」による思春期の性行動に対する認知行動療法的アプローチ，思春期学，23, 295-299, 2005

9）白井瑞子，松原文子，松本三祢，他：思春期ピアカウンセラー養成講座を受講した大学生によるプロセス評価及び受講生の自尊感情と性に対する態度の関連，香川大学看護学雑誌，10(1)，51-63，2006

10）渡邊至：ピアカウンセリングの評価　高校生の評価，思春期の性の健康を支えるピアカウンセリング・ピアエデュケーションマニュアル　ピアカウンセラー養成者・コーディネータ（調整役）版，148-156，小学館，東京，2005

11）坂野雄二：一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討，早稲田大学人間科学研究，2，91-98, 1989

12）片野智治：構成的グループ・エンカウンターの特徴，構成的グループ・エンカウンター，10-33，駿河台出版社，東京，2003

13）　唐津一：かけひきの科学　情報をいかに使うか，PHP新書，東京，1999

14）遠藤辰雄：セルフ・エステイーム研究の視座，セルフ・エステイームの心理学, 8-25, ナカニシヤ出版, 京都, 1992

15）樽木靖夫：学級集団行動に及ぼすフィードバックの効果(2), 日本教育工学会第６回大会講演論文集, 297-298, 1990

16）蘭千壽：セルフ・エステイームの変容と教育指導, セルフ・エステイームの心理学, 200-226, ナカニシヤ出版, 京都, 1992

17）渡辺純一：カリキュラム展開の実際・１，思春期の性の健康を支えるピアカウンセリング・ピアエデュケーションマニュアル　ピアカウンセラー養成者・コーディネータ（調整役）版，29-56，小学館，東京，2005